ええかげんさの大切さ

～ hakuna-matata de life goes on ～

Ver. 2

佐亜歩 門樹

ええかげんさの大切さ Ver. 2

～hakuna-matata de life goes on～

佐亜歩 門樹

そもそも‘ええかげんさの大切さ’なんて、かなりいい加減な響きだけど、どうしてもその大切さを書きたい。‘ええかげん’、標準語ではもちろん「好い加減（いいかげん）」だが、あえて日頃使う‘ええかげん’で通したい。

ところで、【ええかげん】（もちろん辞書には【いいかげん】しか載っていないのは言うまでもない）を広辞苑で引くと、次のような３つの意味が載っている。

①よい程あい。適当。ほどほど。
②条理を尽くさないこと。徹底しないこと。深く考えず無責任なこと。
③（副詞的に用いて）相当。だいぶん。かなり。

ここで述べるのは、②の意味。つまり、徹底しない、無責任と言う意味のええかげんさである。それは、一般的に良い意味では用いられないが、しかし、それが実は大切なんだってことを…。で、同じように広辞苑で【適当】を調べてみると、

①ある状態や目的などにほどよくあてはまること。
②その場に合わせて要領よくやること。いい加減。

と、またええかげんに戻ってしまうのが、ええかげんで面白い。こうなると【加減】も気になるところで、調べてみると

①加えることと減らすこと。加わることと減ること。　②加法と減法。
③程よく調節すること。また、その状態。特に健康状態。　④程度。ぐあい。
⑤傾向。気味。

とある。もともと「足したり引いたりして調整する」という意味だ。その加減を使った表現【手加減】の、２つ目の意味の、『相手の程度、場合に応じてほどよく調節すること。特にあまりきびしくしないこと。てごころ。』の中の、‘てごころ’って言葉が良い。最近、これを知らないがための悲惨な事件はたくさん起きている。

辞書遊びの最後に、【いいかげん】の[類語]を類語例解辞典で調べると、『適当／生半可／ぞんざい／投げ遣り』とあり、その関連語は、『でたらめ／ちゃらんぽらん／行きあたりばったり』とあり、それらの共通する意味は、『大ざっぱで徹底することなく、中途半端なさま』なのだそうだ。

このネガティブなイメージが良い。特に‘ちゃらんぽらん’は語の響きが快いし、‘行きあたりばったり’などは、座右の銘にしたいくらいだ。

おっと、前置きが長くなってしまった。ええかげんにしないと…。

第１章　ええかげんさは命を救う（かも…）

◇日本人の‘待てない’を加速する道路工事の臨時信号機

ところで、ええかげんの反対語は例えば、完璧だ。その完璧主義の弊害が日本ではいたるところで感じられる。それは、ナイロビで３年間（1994年4月から1997年3月まで）暮らし帰国した直後に、特に強く感じられた。

アフリカに行く前には少なくとも自分の身の周りにはなかったもので、帰国して気づいたもののひとつが、道路工事中の臨時信号機。信号の下に、待ち時間がデジタルで表示されるもの。ちょっと前までは人が旗を振っていたのに、それが信号機に替わり、今ではその下に待ち時間までが表示される。ホントに細かいというか…。でも、それは反面、我々が待てないってことの証でもある。待ち時間を表示して少しでもイライラを解消しよという作戦。これを作った人間はこれで完璧だと思っただろうが、こいつのおかげで、たかが１分３０秒が、あと何秒だから我慢しなと言われないと待てなくなるんだよ。恐いね。待てない日本人をさらに待てなくする便利な機械。

どんどん高速化するＯＡ機器だって同じ。高速化して余るはずの時間に、さらに別の仕事をする。同じ時間内に処理出来る仕事の量が増えるだけ。それでホントはのんびりできるはずだったろうに…。

◇待てる‘ターミナル’の主人公

最近みて面白かった映画が『ターミナル』（2004年アメリカ）。この映画はまさに、「待つことの大切さ」をテーマにしている。実際にあったことをベースにした話だというから驚く。祖国のクーデターで国籍が無くなってしまい、９か月も空港に足留をくってしまう男が主人公。この映画では、全編にわたり主人公のええかげんさと誠実さが見ているものの胸をうつ。というか、誠実いっぽんやりでは観る方も疲れてしまうんだよね。彼を取り巻く空港関係者も、実はみんなええかげんさ満載で、良い味を出している。それが観る方を安心させる。

たかが１分３０秒の待ち時間でもイライラしてしまう日本人からすると、ターミナルの主人公はまるで原始人だ。その原始人のおおらかさに今、我々は癒される。

◇待てない日本社会の生んだ悲惨な列車事故

日本の列車がダイヤ通りホームに入って来ることは有名だ。というか、それを私たち日本人は当たり前だと思っている。実は、それ自体が問題だ。私鉄と一分一秒の便利さを競い合う中、悲惨な事故は起きた。兵庫尼崎ＪＲの脱線事故（'05.4.25）だ。その事故で、１０６人の尊い命が失われた。この事故の責任を、運転手ひとりになすりつけてはいけない。会社だけの責任でもない。一分一秒を問題にする日本人気質そのものが起こしたといっても過言ではないのだ。その一分一秒を大切にする誠実さのおかげで、日本の経済に今日の繁栄があることは間違いない。けど、それで何を得た？経済的な豊かさを手にして何を失った？金もうけ至上主義の中、ええかげんでは経済戦線を戦えないから…同時に、おおらかさやゆとりや、そして心の豊かさを失い…、こうして命までもを奪われる。少々遅れたってええじゃんか。そんなちゃらんぽらんさが今の日本で生活する人のこころの中に必要なんだ。

◇かつては待てた日本人：田舎の‘○○時間’

マクドナルドがなぜ成功したかというと、‘人は何分まで待てるか＝客を何分何秒以上待たせてはならない’という哲学を徹底したからだそうだ。前述した信号機と同じ１分３０秒ぐらいだったかな…。これも、本来の日本人気質を壊してしまうものだと思う。注文したら、あっという間に食べ物がでてくる。こんな文化はもともと日本的じゃない。今ごろになって、スローフードなんてことが言われだしたけど、それが本来の姿なんだと思う。

自分が生まれ育った田舎では、会合とかあると予定の時間の３０分は遅れて開会する。それに土地の名前をつけて‘○○時間’とか表現する。そのええかげんさとのんびりさが大切。それこそが本当の豊かさなんだ。

◇遅れるのがエチケット：外国でパーティに招待されたら…

でも、今日の日本では‘いついかなる時でも人を待たせることはいけないこと、失礼なこと’というような風潮がある。だから、外国でパーティとかに招待されても、平気で１５分とかひどいときには３０分も前に出向いて行って、ひんしゅくをかう。招待された時刻よりも遅く行くことがエチケットだなんて知らないから。遅れて行く事が、パーティを準備する者への配慮なんだけど、日本人にとっては、遅れることはええかげんさの極みなんだろう。だけど、実はまさにええかげんさが大切なんだ。日本人は、じゃあ外国でパーティに招待されたら何分遅れて行くのが礼儀なのかを知りたがるんじゃないかな。それこそ、自分のさじ加減で遅れて行けば？とにかく約束より早く行かないこと！

◇待てない日本人の交通事故死

この日本人の‘人を待たせてはいけない、待つのもいや’な気質はいらいらを募らせ、交通事故の要因にもなる。交通事故で亡くなる人の数は平成１６年度で約７千。日本の人口自体が減っているからか、罰則を強化したせいか、年々死亡者数が減ってきてはいるらしいが、７千人と言えば、自分の実家のある田舎町の人口より多い。かつては交通戦争という名前までついていた。そんな少々遅れようが、堅いことは言わない国民性だったら、少なくとも、いらいらが原因で起こる交通事故で死ぬ人の数はもっと減るに違いない。人が多く死亡するデータを見て、自然淘汰だとかいう人もいる。自分の身内が交通事故で死んでも、そんなことさらりと言えるのだろうか。

◇待てない日本人の自殺：データ

ところで、我が国の年間の自殺者数は３万を超える。そんなに多くの命が自ら絶たれている。「死ぬくらいなら、逃げたらいいのに…」って思う。今の状況から逃げ出してしまえばいいのに…。それがなぜ出来ないのだろう。ケニアで３年間暮らして帰国した直後に感じた、日本という国の堅苦しさと自殺者の多さは関係ありそうだ。

と書きながら気になるのでインターネットで日本と世界の自殺率を調べてみた。まず自殺に関するサイトの多さにびっくり！まあ、‘自殺サイトで知り合った者同士が集団自殺’などという報道が珍しくなくなってしまった現状も恐い。

世界保健機構（ＷＨＯ）が2002年にまとめた99か国の自殺率（人口１０万人あたり）は、リトアニアの45人を筆頭に、ロシア35人、ベラルーシ34人…で、26人の日本は11位。日本が世界的のトップじゃないんだね。ただ、Ｇ7※各国の中では２位のフランスの18人に大差をつけて１位らしい。そして、厚生省の2001年のデータによる自殺者数は、３万1042人。こと自殺に関しての情報はいつでもすぐに手に入る。国は、とりあえずこの自殺者数を半分くらいにしたいらしい。それでも年１万５０００人以上となり、交通事故による年間死亡者数の倍だ。

※G7=日本、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、カナダの先進７か国。'86年にイタリアとカナダを入れる前はG5。現在は、'97年にロシアを入れて、Ｇ８。

◇日本という国の堅苦しさ、そして自殺：日本の治安の良さ

何が大切かといえば、命より大切なものはないわけだから、世界で最も治安の悪い場所のひとつであろうナイロビでなんとか無事に過ごせたことと、世界で最も治安の良い場所のひとつであろう日本の片田舎に帰って来れたことはすごく嬉しかった。最初はね。日本食もおいしいし。空気には酸素がいっぱい含まれてるし。ナイロビは、１８００ｍの高地なので空気が薄い…自分は全然自覚症状なかったけど。ただ、帰国して、なんかやたら自分に体力がついてる気がした。まさに高地トレーニングの成果ということか…。

でも、すぐに「この堅苦しさや閉塞感は何だろう」って感じ始めた。なんと言えばいいのか…そう、おおらかさが足りないんだ。おおらかさとは人を許すということ。世は‘勝ち組’と‘負け組’に選別され、お互いが常に戦々兢々として、互いの足を引っ張りあい、相手の弱い所を突き、ちょっとへまでもしようものならそこを逃さず攻撃するといった…そういうことが国会とかで国民を置き去りにして演じられるから…ま、それは日本に限ったことではないと思うけど、少なくとも本来の日本人気質ではないと思う。

でも、ホントは人は他人のことに興味ないから、時間とともに、許しはしなくとも忘れる。つまり、自殺する人は、自分が自分を許せないのだ。実際、人から責められて自殺する人より、自分で自分を責めて死ぬ人の方が多いと思う。だから、自分を救うためにはまずええかげんにならないといけない。これはこうじゃないと絶対にいけないとか、こんなことじゃ絶対にだめとかじゃなくて、物事を適当に流さないと。今流行りの言葉で言えば、‘ゆるい’状態にしなきゃ。そのゆるさが大切だ。張り詰めたヒモはプチンと切れやすいけど、ゆるく、たるんだひもは自らは切れない。

第２章　ゆるゆるポレポレの街ナイロビ

◇ポレポレの意味

その点ナイロビでの暮らしは、治安は悪いけど、全体的には‘ゆるゆる’で‘ポレポレ’だ。ポレポレとはスワヒリ語で「ゆっくり」の意味。実はケニアでは、ナイロビの暮らし自体はもうポレポレではないと言われていた。ナイロビの人の歩くペースを速いなと感じたら初めて本当のケニアが分かったのだとも言われていた。それ以上にゆっくりの生活はなかなか想像しがたいのだけれど…。

ナイロビから郊外に向かって１時間も車を走らせると、美しい田園風景に変わり、本当にポレポレの暮らしがあるらしい。それこそ、電気も水道も電話もないような、それでも牛がいて、畑でもあればそれで豊かさを実感できるような…。

◇インド人の時間の感覚

ケニアには、海辺にモンバサという歴史のある港町がある。そこから首都であるナイロビまでは約５００km。モンバサとナイロビを結ぶ鉄道を作ったのは、当時ケニアと同じイギリスの植民地であったインドからの入植者だと言われている。ケニアにもともと住んでいた人々はだいたい人から命令されて働くということ自体を知らなかっただろうから、全然役に立たなかったらしい。日本でインド人というと、はるか遠くの異国の人って印象があるけど、ケニアではインド人をアジアの同胞と感じるから不思議だ。だって、彼らはもともとアフリカに住んでいた人々と比べるとはるかに約束は守るし、勤勉だし。ケニアの経済はインド人が支えていると言っても過言ではない。実際、自分の大家さんも家具を借りていたのもインド人だったし、息子の幼稚園の友達にインド人の双児がいて、彼らの誕生パーティに息子が呼ばれたりもした。でも、彼らの時間の感覚は、日本人のそれとは全く違う。すごくゆるい。時間に縛られたり、動かされたりするのではなく、自分たちで時間を使っているという感じかな。でも、ナイロビで暮らしていると、日本人も結構そうなっていくから不思議だ。

◇人口100万都市ナイロビ

ナイロビは、日本で言えば東京にあたる大都会だ。人口は'85年の国勢調査で116万2千人。10年後の'95年では、200万人をこえたのではないかと言われている。

国際空港もあれば国会議事堂や、各国の大使館（'98年8月にアメリカ大使館がオサマ・ビンラディンのテロ組織アルカイダにより爆破されたのは世界中のニュースになった）の他、国連環境計画（UNEP）の本部などもあり、ガイドブックなどで紹介される写真で見る限りは大都会の様相を呈している。

でも、日本に帰国して改めて確認したのは、自分の住んでいる人口１３万程度の地方都市のスーパーの品揃えの方が、ナイロビの高級ショッピングモールのそれよりも充実しているってこと。

◇断水でもハクナマタタ

じゃあ、日本人がナイロビ市民より圧倒的に幸せかというと、それはどうだろ。分からないね。でも、少なくとも幸せは物の豊かさではないことだけは分かる。そんなものは、すぐに慣れてしまうから。あればあったでもっと欲しくなる。なけりゃないでなんとかなる。どちらかと言えば、ないなりになんとかする生活の方が楽しいかもしれない。ナイロビでは、現地レベルでは高級な住宅に住んでいたけど、よく電気と水道と電話が止まった。生活する上で、水が最も大切であることを実感させられた３年間だった。断水した時に、風呂の水は出ないけど、庭の水道だけは出るというパターンがあり、そんな時は、バケツの水で身体を洗った。バケツ一杯だと身体が洗えて、二杯あれば髪までシャンプーできた。こんな暮らしはしたくてもなかなかできるものじゃない。でも、やれば不思議と笑顔になってしまう。それで、生活は続いて行く。‘何の問題もない’。それをスワヒリ語で、‘ハクナマタタ’と言う。

◇信号機が壊れていても、roundaboutがあれば…

1963年にイギリスから独立して約３０年後のナイロビに３年間暮らしたのだが、ナイロビ市内の数少ない信号機はほとんど機能していなかった。それでも生活は続いて行く。実は、ビートルズのペニーレインという歌にあるroundaboutというサークルが、信号のない交差点での車の行き来を可能にしている。人口２００万都市のナイロビより、人口１３万の日本の地方都市の車の数の方が圧倒的に多い。道路が完備され、信号ももちろん機能する日本の方が車は圧倒的にスピードを出して走っている。ポレポレとはほど遠い暮らしだ。けど、その１３万都市は日本では、ものすごくのんびりしている所なのだ。

◇台風による停電と家族との時間（突然日本の話）

停電で思い出した。何年か前にものすごい台風が来て、停電が何日か続いたことがあった。都市部では直ぐに復旧したけど、なかなか復旧しない地域から通って来る同僚から聞いた話が印象に残っている。停電何日目かに、ロウソクを立てて家族でトランプをしたという…。電気がなくて、テレビもないから、家族でトランプ…なんて豊かな時間なのだろう。

◇ナイロビの治安の悪さと家族との時間

そういえば、治安の悪いナイロビでは日暮れとともに危険が増すので、相対的に金持ちになってしまって、泥棒たちから狙われやすい日本人は誰も、暗くなる前に帰宅していた。それは、昭和のある時期まで日本のどこにも存在していた普通の生活かもしれない。家族との濃密な時間。そんな暮らしは、後にも先にもその３年間だけだった。「小金を出せば警察がどろぼうに鉄砲を貸す」という噂がまことしやかに流れるようなええかげんな場所ナイロビ。治安が悪いがゆえの、家族との濃密な時間。比べるものじゃないけど、幸せはここにもそこにもどこにでもある。でも、少なくとも物質的な豊かさを追求するばかりでは、遠のいてしまうものかもしれない。

第３章　ええかげんさがあれば英語もできるようになる（かも…）

◇英語の話せない日本人というレッテル

完璧主義の弊害は、例えば日本人が英語を話せないレッテルを貼られる要因となっていることは間違い無い。それに加えて、恥の文化。恥をかくくらいなら黙っておこうとする。それは、おくゆかしさだったり、思慮深さだったり、思ったことやあることないこと全てを人に言葉でぶつけたりしない日本人の良さでもある。良さは同時に弱点にもなる。ということは、日本人がみんな英語をぺらぺらしゃべりだすようになる社会は、誰も恥を知らない、おくゆかしさも思慮深さもない、とんでもない日本になっているってこと？それはちょっと短絡的すぎるかも知れないけど…。

◇文法も発音も気にせず、strategic competenceを使って

英語の使える日本人を育成したい側から言えば、とりあえず完璧主義を捨てて、ええかげんに英語を聞く話すと良い。このええかげんさは大切。つまり、人の話す英語の１０の内の２でも３でも分かったら、全部分かったような顔をして、文法、発音なんかを気にせず、とにかく伝えたいことをどうどうと話す。単語を並べる。３人称単数のことは忘れる。複数形だろうが単数形だろうが気にしない。過去形だろうが未来形だろうが、とにかく伝われば良いというええかげんさが大切。

このええかげんさの大切さを、言語学者は別の言葉で、strategic competence などと言ったりする。なんとか切り抜ける能力。なんとか切り抜けるためには、ほんとにええかげんさが必要となる。母国語を使っている時でさえ、人の話すひとことひとことをもらさずに聞いているわけじゃない。ひとつひとつのことを生真面目にいちいち気にしていると、結局はしゃべれなくなる。

◇生真面目さゆえの communication breakdown

その生真面目さによる communication breakdown は、ホントに真面目な生徒ほど起こりやすい。授業の最初の挨拶からして、How are you? で、少々鼻がむずかゆかろうが、微熱があろうが、ちょっとお腹が痛かろうがI'm fine. って言ってしまえば良いのに、How are you? と尋ねられると、黙って目を白黒させている生徒にどうしたの？って尋ねると、「喉がちょっと痛いんですけど…」って。それはそれで、そんな時にはこう言うんだよって勉強になるけど、授業を受けられると判断して教室へ出てきている限りは I'm fine. と、ある程度ええかげんに言っておけば良いのだ。

◇しょせん教室では pseudo-communication

しょせん教室におけるコミュニケーションは、いわゆるpseudo-communication（疑似コミュニケーション）であるのに、超生真面目に本当のことを言おうとするから、そこで前に進めなくなる。このあたりのええかげんさの大切さは、英語の授業だけで教えられるものでもない。常日頃から、ええかげんさが実は大切なんだということを誰もが分かり、社会全体がおおらかに、互いを許し合い、認めあう社会に成熟しないと難しいだろう。

◇こころとこころを開き合う

「ええかげんさの大切さを表立っては言わないが、根底ではそれを大切にしている成熟した社会」の反対側には、「自分の弱点を隠し、相手の弱点をつき、食うか食われるかの利潤追求型の社会」がある。そこでは、ええかげんさは完全に否定される。そんな社会では当然人々は心を閉ざしてしまうから、コミュニケーションは成立しにくい。こころとこころを開きあうところからコミュニケーションは始まる。というか、開きあっていれば、言葉はそう重要ではない。英語が苦手と言う日本人に必要なのは、まずこころを開くことかもしれない。以心伝心に近いものがあれば、後は少し言葉を足すだけでいい。そんな状況だと、単語ひとつふたつ並べるだけで、十分コミュニケーションは成立するだろう。

それは、日本語を使う外国人に対して私たちが実はものすごく寛容であることからも分かる。自分の英語に対しては完璧をもとめるがゆえ、文法、発音、表現といろいろ気になって仕方ないくせに、外国人の話す片言の日本語にはそれを要求しない。逆に、変な日本語を好ましくさえ思うはず。だから、それをええかげんさだとしたら、自分にもそのええかげんさを適応すればいい。その意味のええかげんさがあれば、誰だって英語なんかすぐに話せるようになるはず。

◇ええかげんを英語では何と言うか：scamp

ところで、この‘ええかげんさ’を英語で表現するとどうなるかについて述べる。＜無責任＞ということであれば、irresponsible。＜あいまい＞なら、vagueあたりか。この辞書遊びで、面白い単語を見つけた。「仕事をええかげんにやる」という表現で、do one's job in a half-hearted way や、leave a job half doneとともに、scamp one's jobというのがあって、このscampという単語、名詞だと

> If you call a boy a scamp, you mean that he is naughty or disrespectful but you like him, so you find it difficult to be angry with him. 〔コウビルド英英辞典〕

一言で言えば、‘いたずらっ子’とか、‘わんぱく小僧’って感じだろうけど、その説明の中の、「その子のことが好きで、叱る気になれない」というのが良い。こっちの言うことを聞かなかったり、下品だったりするんだけどなぜか憎めないってことなんだろう。それはまさに、ええかげんさの持つ意味合いと同じで、人を「ええかげんだ」と言う時、それは決してほめ言葉ではないけれど、どこか憎めないという感覚。それは、ええかげんさを無意識に心の中で受け入れている証拠なのだ。

◇物事を白黒はっきりさせるか、グレーゾーンか

英語を話す人は、無意識に物事を全て対比する２つの概念に分けると聞いたことがある。善か悪か、白か黒か、有か無か、男か女か、大人か子供か…それに対して、日本語話者のベースにはあいまいさがあると。

アメリカ映画の勧善懲悪ものでは、悪は徹底的に悪く表現され、最後には完璧な善から滅ぼされるようになっているものが多い。一方、日本語を話す私たちに、世の中の全てが白か黒かに分かれるとは思えず、必ずその間に、グレーゾーンが存在すると信じている。悪人の中にも善の心はあり、善人の中にも悪の心はあると。そのグレーゾーンこそがええかげんさの守備範囲。ええかげんな映画は面白くないから、極端にそうしているのだろうけど、日本語圏では物事の白黒をはっきりさせるのは本来の姿ではないようだ。だからこそ、戦争で殺しあい、日本を負かし占領したアメリカとでも、今ではまるで恋人同士のように仲良くやっていけるのかも知れない。

ええかげんと言えば、ええかげんだけど、そのええかげんさのお陰で、今の良好な日米関係があることは間違いない。一方、首相の靖国神社参拝をめぐって、中国とは外交上全くうまくいかない。互いにもっとええかげんになって、歩み寄れば両国の関係はすぐに改善されるだろうけど…。これなんかは、喧嘩している子供にむかって、「お互いもうええがげんにしろ！」って言いいたくなる状況だ。

◇歌詞を忘れてもええかげんにハミングでつなぐ

話を英語学習に戻すことにする。英語の習得に有効なのが、歌と映画だ。楽しみながら学べる。英語の歌を歌う時に、歌詞を全部理解して、読めるようになってからでないと歌わない人と、とりあえず意味は分からないけど、聞こえるように歌ってみようという人がいたとしたら、英語が話せるようになるのは確実に後者だ。

たまたまみたＮＨＫの英会話番組でやっていたのだが、歌詞を忘れたりしても、メロディに合わせてハミングなり、適当に歌うことが大切だと言っていた。まさにそうだと思う。生真面目な人はなかなかそれができなくて、つい黙ってしまう。そうじゃなくて、もっとええかげんになって楽しんでほしい。楽しみながらじゃないと何でも続かない。楽しく続けられたら、英語も自然と自分のものになるはず。

映画もそうだ。日本語の字幕を読みながらの映画鑑賞で結構。最初から字幕なしで頑張る必要はない。最近はＤＶＤのハードもソフトも随分安くなった。字幕を英語にしたり、日本語にしたり、カットしたりが自由にできるので便利だ。しかし、あの字幕と言うのは字数制限があり、たとえ英語の字幕にしても、実際の台詞は全ては表示されない。そのええかげんさがいい。まずは楽しんで、それから言葉を意識して、２度３度と同じ映画をくりかえし観れば、確実に英語の学習になる。英語の学習のために観るのか、楽しいから観るのか、それはどっちでも良い。と、ええかげんに気楽に楽しむことが一番。歌や英語で楽しんでいると、ある日突然英語が、まるでスポンジが水を吸うように耳から入ってきた！ということになるかも知れない。

おわりに

ええかげんな人間にもっとええかげんになりなさいよって言いたいわけじゃないけど、不思議とええかげんな人間ほど、自分はまじめにやってますみたいなポーズをとりたがるものだ。どちらにしても、完璧主義はよくない。ぴりぴり、ぎすぎすしてないで、ゆるゆる、のんびりやりましょうってことが言いたかっただけ。

メダル獲得がなく日本人にとっては盛り上がりに欠けたトリノでの冬季オリンピック（'06年2月開催）も、最後になって、フィギュアスケートの荒川選手の金メダルで一気に盛り上がった。ショートプログラムで３位だった彼女、フリーでは大きなミスもなく、上の二人が転けてくれて金メダルが舞い込んだ形だ。運も実力のうち。ところがそれを正直に口にした小坂文部科学大臣は、世の中からたたかれて、謝罪した。言う方も言う方だけど、それにクレームをつける方もつける方だ。どっちもどっち。政治家だってたまには本音で話をしてもいいじゃないかって思う。外交問題に発展したりすると困るけど。「上位の２人が転けた瞬間嬉しかった」と本音を言ってしまった文部科学大臣よりも、それにクレームつける連中の方が健全じゃないと思う。そんな人に、ええかげんさの大切さを伝えたい。ええかげんさは寛大さだよ。それが根底にあるのが成熟した大人の社会だよって言いたい。

思いつくままにたらたら書いているといつまでたっても終われないから、もうええかげんにしときます。

注：カットの写真は、ナイロビに暮らす３年間で著者が撮ったもので、本文の内容に直接は関係ありません。

Wednesday, March 15 2006

To my son, who overcame the second obstacle in his life today
to pass the entrance examination for his target high school.
The first one was to have an 8 hour operation to patch
a hole in his heart only a few months after you were born.

Tuesday, November 7 2006

Thanks to Yukie Saito, I have a chance to talk about my expeirences
in Nairobi to many students in Ato Life-Long Learning College on Nov.15 '06.
This made me read this essay again and find some parts to correct
or add some more explanation to make it better.

A THOUSAND WINDS

Do not stand at my grave and weep,
I am not there, I do not sleep.

I am a thousand winds that blow,
I am the diamond glints on snow,
I am the sunlight on ripened grain,
I am the gentle autumn's rain.

When you awake in the morning hush,
I am the swift uplifting rush
of quiet in circled flight.
I am the soft star that shines at night.

Do not stand at my grave and cry.
I am not there, I did not die.

Author Unknown

ええかげんさの大切さ Ver. 2

～ hakuna matata de life goes on～

by Surf Monkey on Tuesday, Nov.7, 2006

The First Version was written on March 15, 2006

〒753-0811 山口市吉敷1434-9

藤 田 譲 二